

# アルパック ニュースレター



赤穂のしおばなまつり（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1999年7月1日

- 「湖國十二坊の森」と十二坊温泉“ゆらら”がオープン  
しました ..... 2
- 大学生による中心市街地活性化の取り組み ..... 4
- 韓国のごみ問題、沿岸域管理、そして地方自治 ..... 6
- “おもいで”は生きている ..... 8
- まちの素顔を知るにはまず歩くことから ..... 10
- 京都府総合教育センター北部研修所がオープンしました ..... 12
- ジャズダンスにトライ ..... 13
- “名古屋まちづくりデータブック”を編集・発行しました ..... 14
- 新刊旧刊書評紹介 ..... 15
- まちかど ..... 16

NO. **96**

## 「湖國十二坊の森」と十二坊温泉“ゆらら”がオープンしました

原田 稔

滋賀県甲西町は琵琶湖の西、草津から車で30分ほどの所に位置し、町を流れる野洲川を中心に農業で栄えてきた町です。また、町内を旧東海道が通り、街道沿いには古くからの造り酒屋が残り、隣町には石部の宿場がありました。

近年の工業団地やニュータウンの開発により人口も急激に増え、現在では4万人を越える町となりました。一方では藍染めや下田焼き、創作和太鼓などを次世代へ伝承しているという動きもあり、昔懐かしい田舎と新しいまちの風景と文化が共存しています。

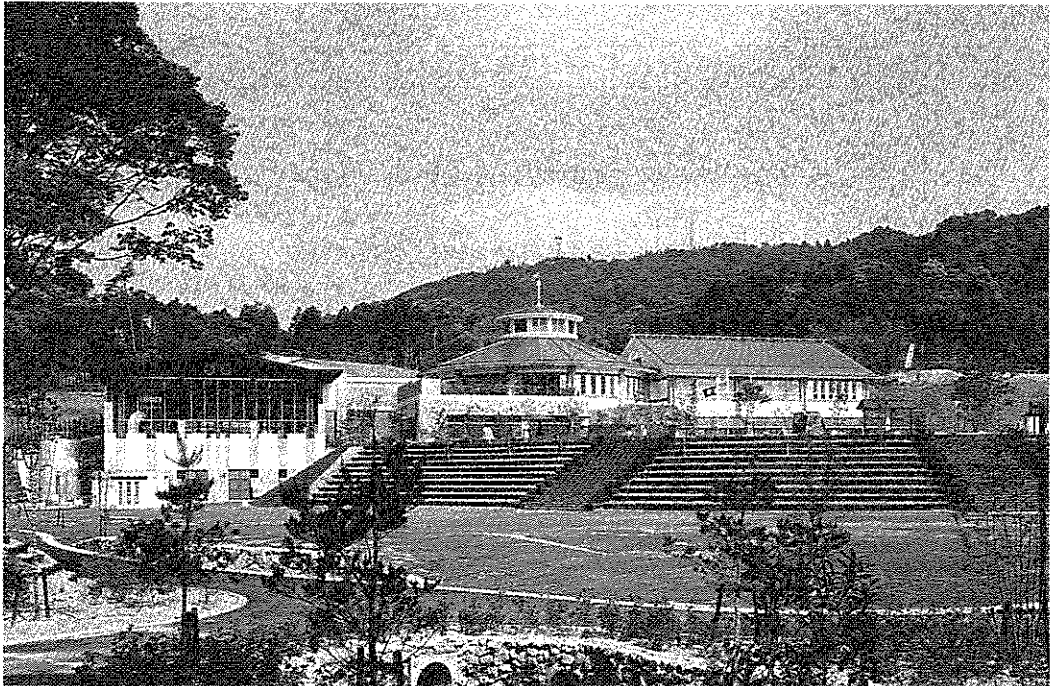
また、「湖國十二坊の森」のある岩根山には、かつて仏教の修験道場として十二の僧坊があり、古くから「十二坊」の名で親しまれています。

地域整備構想を踏まえて計画は平成6年に

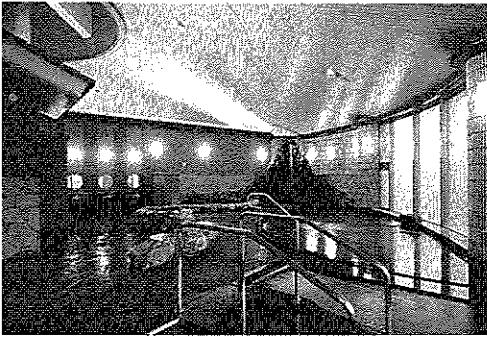
温泉が湧出したのを受けて始まり、基本計画、基本設計、実施設計そして建設工事と6年の歳月を経てここに施設の完成を迎えました。

古きものと新しいものとの共存は、まちの風景や文化においてだけでなく、このまちに住む人々の間にも必要となってきました。そこでここでは地方の温泉施設に見られるようなまちおこしや観光のためのものではなく、町民の交流やアイデンティティ創出のための拠点となるハードとソフトを、温泉を核として整備していくことを構想段階から提案してきました。

「湖國十二坊の森」は、かつて「肉体と精神の鍛錬の場」であったこの場所に、町民のふれあいと健康づくりの場として温泉施設“ゆらら”を中心とした「肉体と精神の開放の場」、すなわち現代版「十二坊」を創造しています。



外観全景



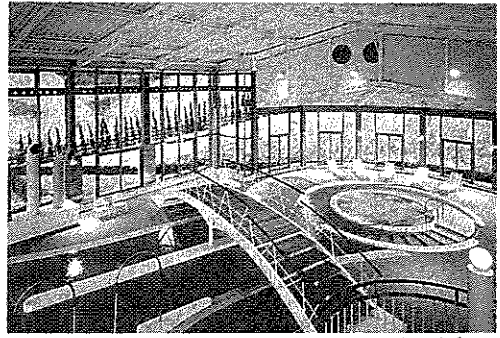
修験の湯

つまり、会社や色々な場所での疲れやストレス、その他もろもろのことをお湯に浸かってさっぱり洗い流し、明日への活力としてもらおう、町の人が元気であればそこからまちの将来も描いていけるのではないかとということです。

“ゆらら”の外観は現代版「十二坊」を象徴するように、森の中の寺院をイメージしました。中心となる浴室は、岩場の荒々しい修験道場をモチーフにした「修験の湯」と、桓武天皇の病気を治したとのいわれのある水の涌き出る、岩根山の善水寺「百伝の池」をモチーフとした「百伝の湯」の二つがあり、隔週入れ替わりで楽しめます。「修験の湯」は自然石を使い滝風呂から泡沫湯、寝湯へと動から静への悟りをイメージした色々な浴槽が楽しめます。もう一つの「百伝の湯」には外の景色を眺めながらゆったり入れる大きな浴槽と露天風呂があります。

また、からだの不自由な方も利用できる家族風呂や機械浴室も備え、全ての町民が温泉を利用できる施設となっています。

温泉を使った屋内バーデプールでは、幼児用プールやフローティング、ネックシャワーなど泳ぐというよりは遊びの要素を多く取り入れ、またリハビリにも利用できる歩行浴も備えるなど、誰もが一年中利用することができます。その他、畳敷きの休憩室、リラクゼーションルーム、トレーニングルーム、研修



バーデプール

や文化教室としても利用できる多目的室、交流サロン、レストランがあります。

屋外には森林浴トリムコースやジョギングコース、芝生広場や庭園などが整備され、家族で遊びに来たり、健康づくりやイベントなど、子供からお年寄りまで誰もが利用できる施設となっています。

“ゆらら”は4月30日にオープンし、おかげさまで連日たくさんの人で賑わっています。温泉施設としては好調なスタートを切ったわけです。今後はここに集まってくる人々をどの様に巻き込んで、町民の交流やアイデンティティの醸成といった課題に取り組んでいくか、スタートはちょっと出遅れましたがソフト面の充実を図っていかなくてはなりません。

最後になりましたが、“ゆらら”という名称は、町民募集し応募の中から選ばれました。お湯の中で思わず「ららら〜」と口ずさみたくなるような施設であって欲しいという願いが込められています。

誰もが自慢できる自分たちのまちの温泉につかりながら、自分たちのまちの将来について語り合ってもらえる場所になることを私も願っています。

(大阪事務所 はらだ みのる)

<問合せ先>

十二坊温泉ゆらら

滋賀県甲賀郡甲西町岩根678-28

TEL 0748-72-8211

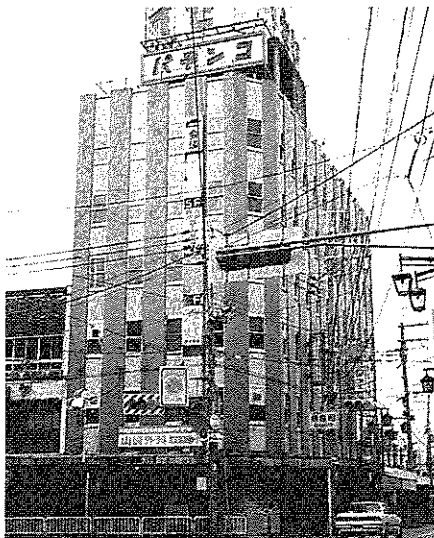
## 大学生による中心市街地活性化の取り組み ～ACT STATION～

藤 正三

近年、多くの都市の中心市街地が人口の減少や高齢化、商業環境の変化、モータリゼーション進展等を背景に衰退しており、深刻な問題になっています。このような中、かつての街の顔である中心市街地を再生させようと11の関係省庁が連携して中心市街地活性化法（中心市街地における市街地の整備改善および商業等の活性化の一体的推進に関する法律）を平成10年8月に施行し、全国的に取り組みがはじめられています。その中で一風変わった取り組みが彦根市の銀座商店街で行われています。

彦根市にある滋賀県立大学の学生が空き店舗対策の一環として自主サークル“ACT”を結成し、まちづくりなどの活動拠点となる“ACT STATION”（アクトステーション）を昨年10月30日にオープンさせました。

ACTとはAction Connect with Townの略で、「活動はまちにつながる」という意味です。「学生がまちの中でできることをする」



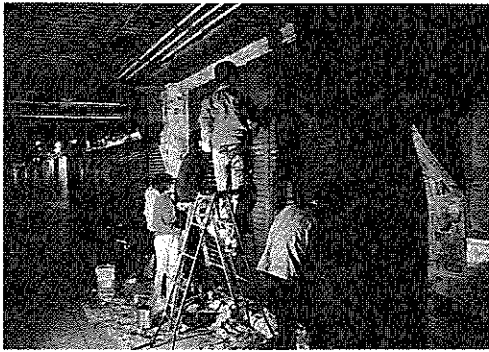
空き店舗ビル：イセヤビル

「じっとしては何も変わらない」「動くことを大切にしたい」と思う気持ちから、学生有志が集まり、まちづくりと自己実現の場として、様々な取り組みを行っています。

ACTの活動は、登り町商店街が滋賀県立大学環境科学部の柴田いづみ教授にアーケード改修の相談を持ちかけたのをきっかけに、柴田教授が「アーケードの改修もいいが、まずシャッターが閉まっている店を開くことが大事」と提案したことにはじまります。学生や地域の人と交流でき、お客を集めることができる店舗を学生が企画・運営していく計画を学生自らが提案し、4つの商店街が交わる一角にある6階建ての空き店舗ビル（イセヤビル）の1、2階部分を格安で借り活動を開始しました。しかし、順風満帆にスタートしたわけではありません。ビルは7年間空き店舗として放置されていたこともあり、電気、上下水道、ガスが使用できませんでした。また予算も無いことから、廃材を利用したり、不用品をもらい受けたりしながら、学生自らの力で改装しオープンさせました。

オープン以降、滋賀県立大学祭のプレイベントのライブをはじめ、商店街のお祭り「あびす講」に参加してストリートライブや露店、似顔絵描き、ファッションショーを開催したり、また、まちづくりシンポジウムと題して商店街や地元住民への勉強会や子どもたち向けに「アニメーションで楽しもう」とイベントを行ったりで、学生の特技やパワー、アイデアをまさに最大限に生かした様々な取り組みが行われています。

また、“ACT STATION”は“ACT Salon”と



学生たちによるビルの改装

して「学生」と「まちの人」との交流の場としても開放しています。“ACT Salon”には、リサイクルで集めた本やマンガ、商店主から譲り受けたステレオやジュークボックスなどが備えられ、色々な人が気軽に出会い、話し合える場所として活用されています。また、ギャラリーやライブハウスの場所としても貸し出しています。“ACT Salon”は地域の情報発信の場や活動の拠点、さらにはリサイクルセンターとしての機能をも担いつつあります。

このようなACTの取り組みは、これまでよそものを受け入れにくかった商店街の重い腰を上げることにつながり、商店街と地元、学生、大学、地域の企業等との架け橋として、また、まちづくりの起爆剤として一役かっています。

ACTはまだまだ商店街での認識も低く、学生であるため信用性がないなど運営上の難問が山積みされています。しかし、このACTの取り組みを住宅・都市整備公団が公募したコンセプトコンペ企画部門に「学生参加型の新しいまちづくりを提言」として出展したところ、これが優秀賞を獲得するなど社会的に認知されるようになってきました。

活動をはじめて半年余り、ようやく緒に付いたばかりです。現在、ACTのスタッフは14名。3月末には上下水道や内装工事が進められ、トイレやキッチンも備え付けられまし



ACT「ぬびす講」のイベント

た。今後は喫茶店を兼ねたライブハウスを開設することも計画しています。

さて、このACTの活動を知るきっかけとなったのは、滋賀県の景観指針「(仮称)淡海風景プラン」の策定調査をお手伝いしたことにはじまります。調査では今日的な課題でもある「中心市街地におけるにぎわいの景観づくり」がテーマの一つとしてあげられ、それに対して若い人から斬新なアイデアを提案してもらいたいことから、彦根市や県立大学の先生の協力を得て学生を募りワークショップを行いました。そこでACTのメンバーも大勢参加していただき活発な議論が繰り広げられました。また、会場も“ACT STATION”を貸していただきました。

これからもACTがまちづくりの活動の拠点として、また自己実現の場として、一步一步確実に歩みながら、継続的に取り組んでいってほしいと思います。

(京都事務所 ふじ しょうぞう)

ACT STATION でのワークショップ  
学生たちが楽しく活発に議論した

## 韓国のごみ問題、沿岸域管理、そして地方自治

杉原 五郎

正直言って、これまで韓国は私にとって「近くて遠い国」でした。しかし、今回を含めて4度の韓国訪問によって、心理的なカバも薄らぎ、「カムサムニダ（ありがとうございます）」のハングル語もやっと口をついて出るようになりました。

### 4度の韓国訪問

はじめて韓国を訪れたのは、日本と韓国と台湾3ヶ国の都市計画学会主催によるワークショップが韓国で開催された1992年の秋でした。2回目に韓国を訪れたのは、1996年の秋で、これはNIRA（総合研究開発機構）の研究助成を受けて韓国の沿岸域事情を調査するためでした。3回目は、昨年春、「沿岸域管理（Integrated Coastal Management）」をテーマとする国際ワークショップがソウルで開催され、日本からの参加者として大阪湾ベイエリアにおける環境保全創造の取り組みについて報告する機会を得たためでした。4回目となるこのたびの訪韓は、「地方自治と環境政策」をテーマとする調査・交流の旅でした。ブサン市での生ごみ堆肥化の試み

日本では、所沢（埼玉県）の産業廃棄物問題や能勢（大阪府）のダイオキシン問題などこのところごみ問題が大きな話題になっていますが、お隣の韓国においても、ごみ問題は相当深刻な問題となりつつあるようです。日本では、焼却処理が一般的で、焼却率は全国平均で75%程度と極めて高くなっていますが、韓国では、これまでは埋め立て処理が主で、焼却処理はあまりなされてきませんでした。例えばブサン広域市では、生活廃棄物の14.5%が焼却処理されているに過ぎず、埋め

立てが41.1%と大きな比重を占めています。しかし、最近になって、ブサン広域市や光州広域市では、高層の集合住宅団地の近くに建設されたごみ焼却施設が住民の反対によって稼働させることができないまま放置されるという事態が生じています。

さて、こうした状況の下で、ブサンでは、生ごみ堆肥化の試みが住民の自発的な取り組みとして進展しています。ブサンでの生ごみ堆肥化運動は、韓国赤十字社の重職にある裴（ハイ）命昌さんという人が始めました。最初はなかなかうまくいかず、団地の人々や家族にも理解されなくて相当苦労されたようです。しかし、独自の研究と粘り強い意志と断固たる行動によって新たな状況を切り開き、いまではブサン市110万世帯の3割近い約30万世帯において生ごみ堆肥化の取り組みが展開されるようになってきました。ブサン広域市と区は、堆肥化プラントを建設するなど市民の取り組みと連携した施策を推進しています。ごみ堆肥化を推進してきた中心人物の裴さんにお会いするとともに、堆肥化センターを視察することにより、生ごみ堆肥化が都市における生活系ごみの減量化と再資源化にとって極めて有効であることを実感しました。



ブサン市での市民活動グループとの交流

## 統合的な沿岸管理法の制定

韓国では、昨年12月の国会で「沿岸管理法」が制定され、本年8月から施行されることになっています。わが国においても、昨年3月に閣議決定された「21世紀の国土のグランドデザイン」の中で〈沿岸域圏の総合的な計画と管理の推進〉が位置づけられました。

今回の韓国調査の機会を利用して、昨年の国際会議で知り合いになったKMI（韓国海洋水産開発院）の研究者を訪ねて、「沿岸管理法」の概要、制定の背景と経緯、これからの見通しなどについてヒアリングすることにしました。沿岸管理法では、国レベルの「沿岸統合管理計画」と広域市や道など地方レベルの「沿岸管理地域計画」をそれぞれ策定することになっています。また、沿岸整備事業の10ヶ年計画を立てて事業の推進を図ることとしています。KMIの研究者によれば、新たな沿岸管理法制定の背景には、大規模な埋め立てによって干潟が消滅しつつあること、このために沿岸域の開発について環境面から一定の歯止めをかけ、統合的な沿岸域管理システムを確立する必要があったということでした。韓国では、中央政府の力が強く、広域市や道など地方政府の参画については制度化されたものの、実態化はまだこれからといった印象を受けました。

### 歩き始めた韓国の地方自治

韓国では、1991年に地方自治制度がスタートしました。1995年と1998年に首長及び議員の選挙が行われ、韓国の地方自治は本格的な歩みを始める段階にあると思います。今回の韓国訪問は、韓国の地方自治関係者との交流を意図したものでした。プサン大学のシンポジウムでは、日本側から地方分権の動向と地方自治体の財政自主権などについて問題提起がなされ、全南大学でのシンポジウムでは、



光州広域市の副市長との懇談

ごみ問題を含めた環境問題が大きなテーマとなりました。プサン、光州、ソウルの3市では、環境問題や住民自治のテーマで活発に運動を展開している市民活動グループと交流することができました。

大学の研究者や市民運動グループと交流して3つのことを感じました。第1は、韓国では地方自治の問題がいまたいへんホットなテーマになっており、関係者の間では地方自治に対する強い意気込みと活発な取り組みがなされつつあることです。第2には、日本と韓国の地方自治をめぐる事情は大きく異なっているのですが、ごみ問題を含めた環境対策や沿岸域管理など共通する課題も少なからずあるということです。そして第3に、日本と韓国の間では研究者や市民など草の根レベルの情報交流と人的交流をさらに強め、お互いの事情をよく理解した上で率直に学びあうことが極めて重要であると実感しました。

### 身近になりつつある韓国

これまでの4度の韓国訪問では、公式の会議や調査の合間を縫って、韓国各地の史跡、社寺、景勝地、博物館、市場などを訪ね、韓国の歴史や文化にじかに触れる機会が何度かありました。また、多くの韓国の方々と食事をともにし、楽しくふれあう場を幾つか経験しました。韓国は、私にとって、少しずつ身近な国になりつつあるようです。

（大阪事務所 すぎはら ごろう）

# “おもいで”は生きている

奥田 東先生の教え

三輪 泰司

4月28日、奥田 東先生ご逝去。享年93歳。

1月31日日曜日の朝方、先生が呼んでおられるような気がして八瀬へ車を走らせました。先生はベッド脇で、車椅子に座って、テレビのスキー競技を見ておられました。

「元気でやってくれよ」と握られた手は、温かくてとても強く、放そうとなさらないのです。それから、2週に1度、お伺いしましたが、お菓のせいでしょうか、深く眠っておられて言葉を交わしたのはそれが最後でした。

5月30日の日曜日、相国寺・大光明寺での奥田家の忌明法要に、お招きをうけて、お参りました。20余名でしたが、先生のお人柄の広さ深さですね、お供養の席で、めいめい語られた先生の“おもいで”は、学問指導からお酒の話まで、多彩を極めていました。

ニュースレターNo. 32～35(1988年11月～89年5月)に「学研都市10年—奥田先生と語る」と4回シリーズで書きました。関西文化学術研究都市構想の立ち上げを巡る非公式記録を、ほぼ尽くしています。

それから10年経ちました。

濃密なご縁のはじまりは、1971年11月に、京都東ロータリークラブに、入会させて頂いた時から。実はその前に、先斗町の井雪で、西山卯三先生にお引き合わせ頂いていましたが、



5月31日 忌明供養 遺影と(ブライトンホテル)

おそれ多くて、ろくに口もきけませんでした。推薦者のお一人は、建築学科の恩師・前田先生でしたが、入って驚いたことには、平澤興・奥田 東・前田敏男・岡本道雄と京都大学の歴代総長が、ずらりとおられました。

そうしてもうお一方、大事な方、河野卓男氏も会員。河野さんは1963年に、同じく西山先生に京都ファッション産業団地のフォローを頼む、とご紹介されていました。考えてみますと、皆さん、三高・京大の先輩・後輩なのです。この絆には感服しましたが、それにはもっと強く深い意義があることは、後になって分かってきました。

ロータリアンは学者も町人も対等平等。というわけで、奥田先生を中に河野さんと三人、毎週金曜日、お昼御飯をたべながら、科学技術のイノベーションと哲学を話しあっていました。学研都市“神代の時代”です。

先生は、1975年12月末、金曜会という会の会長になるので、例会に出られないと、退会されました。理事に選出されていたので、クラブ幹事に指名されていた私は、理事補充に忙しい目に合いました。

忙しく、充実した日々は、それから始まりました。関西空港に習って調査懇談会方式をとり綿密な準備を重ね、1977年2月5日、上高野の奥田邸で、構想骨子と準備会設立を決定し、正式に“秘書官”に任命されました。

4月末、京都府総計審南山城部会で、栗林副会長が研究学園について発言。西山部会長が、位置付けを採用。5月4日、大阪キャッスルホテルで第1回懇談会準備会。6日に西山先生から連合大学院大学と学術会議勧告施



設を盛るよう指導を受け、基本構想案概要のまとめ。1978年9月14日、いわゆる奥田懇談会発足。以後は「学研都市10年」に記したとおりです。

河野さんも、1979年2月に、京都ロータリークラブへ移られましたので、作戦会議は、市内某所で、現職の岡本総長、沢田学生部長、荒巻副知事といった具合に大きくなりました。先生は「こんな大きなことは、自分がやると言える人を何百人とつくることや、そうなたらはじめの仕掛け人は、後ろでにこにこ笑ってたらいいのだ」とおっしゃいました。「おもいで」という本が、1996年5月、先生卒寿の記念に出されました。

幼少の頃は人づきあいが苦手で、ひっこみ思案であったこと、植物相手なら勤まるだろうと農学を選んだこと、それが持ち回りであった農学部長の時、東南アジア研究センター問題が起こった。学生が集会をしていたので、どうしたことかと入っていった。当の責任者が向こうから来て、話を聞こうと言うので反対派の学生達は、氣勢をそがれたとぼやいていたらしい。学園紛争ようやく激しさの兆しが見えた頃、奥田にやらせろという感じで、総長に選ばれてしまった。総長なんて全く自信がなかった。とにかく学生や関係者の話を聞いた。代わりにこっちの言い分も聞いてくれと、対話が始まる。話せば理解も進む、人間は進歩するし、考えも変わるものである。

反対者の声を圧殺するなど、もってのほかである、と悟った。

こうして後半生、すっかり違った生き方になってしまった。と「たどり来し道」「時計台の下で」で書いておられます（ゴーストライターは京都新聞の杉本良夫氏）。

地域計画などという仕事が成り立つか自信がなかったし、経営などもっと自信がなかつ

た、自分では意図したり、固執していないのに何時の間にか、経済界や学界で責任ある場所に立たねばならなくなった、様々な立場や考えの人と対話し、理解に努めること、権威や権力で抑えこむなんて、やってはならない。と教えられたことを守ってきたつもりです。それ以後は...という、木屋町の、そして祇園の“この芽”ですね。「お金はいらん、ゴルフと酒さえあればいい」先生の両方どもの根拠地です。ここは庶民達に混じって沢田敏男先生はじめ、歴代総長も仲間です。奥田先生のお誕生日は8月19日ですが、毎月お祝いしようと、若い人達が語らって「知新会」という集まりをつくり、毎月19日前後に楽しんでいました。昨年末12月16日、都ホテルでは、先生は病院を抜け出してこられ、たいへんご機嫌でしたが、これが最後でした。

先生は総長退任後は、いろいろな団体の理事長や顧問を引き受けておられました。どれもボランティア。その中で、最後まで勤められたのは「社会福祉法人京都いのちの電話」の理事長でした。一人の女性を救うことができなかつたご自身の悔悟を秘めて、悩みをもつ人々のために、ご奉仕されているいのちの電話の皆さんを一生懸命に助けておられました。



1995年11月18日 卒寿祝「この芽」にて写す

地球環境と人類の幸福のためにとの思いを込めて、情熱を注がれた学研都市づくりは、第2ステージに入りました。

6月23日に、関西文化学術研究都市推進機構はじめ関係の方々が、学研都市生みの親である先生とのお別れ会を催して下さるそうです。国際建築家連合(UIA)の大会出席のため北京へ行っておまして、失礼致します。

北京大会では、UIA Accord 建築家の倫理規定が採択されます。安心・安全な地球環境時代の建築のために、建築家の資質と倫理が問われています。UIAはUNESCOを構成する国際組織です。世界は変わってきています。

6月6～7日、京都国際会館で「地球環境フォーラム」が開かれました。商工会議所も主催団体に加わっていますので、世界環境都市推進特別委員長として参加し、ご挨拶しました。

「地球環境時代の科学技術シンポジウム」は、市民、経済人も加わり、迫真の議論が交わされました。フォーラムの企画、運営に尽力頂

~~きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況~~

まちの素顔を知るにはまず歩くことから  
～播州赤穂のしおばな祭り～  
高野 隆嗣

大河ドラマ「元禄繚乱」の放映で、脚光を浴びている赤穂市ですが、その中心的な舞台である城下町加里屋が、今、まちづくりに燃えています。

#### 平成の城下町をつくろう

赤穂市加里屋地区は、播州赤穂藩の城下町として栄えた所です。一昔前までは映画館があり普段からとても賑やかで、たくさんの人々の熱気で溢れていたそうです。しかし、塩田が衰退し時代の波というのでしょうか、今年は大河ドラマの効果で週末や連休を中心に

いた学研都市の中核的研究施設・地球環境産業技術研究機構(RITE)の役割はますます大事になるでしょう。

強権を背景とする経済的世界制覇の路線もありましょうが、21世紀の日本は、安全保証・産業振興、そして国民生活の福祉のために、独自の科学技術開発が大事になるでしょう。

それは同時に、世界の平和と人類の幸福に貢献するのです。

奥田先生の信念は、学研都市に、そして、科学者・技術者の心に生きて行くでしょう。

ご長男の稔さんが「父はまだこのあたりに居るような気がします」と言われました。ほそりと「元気でやってくれよ」としか言えなくて、弁舌爽やかに、理路整然と伝えられなかったけど、自分の生き方から、それぞれにつかんでくれたか、見守っておられるのでしょうか。

教えから学び“おもいで”を生かして行くのは、私達自身です。

(取締役会長 みわ ひろし)

たくさんのお客さんが訪れていますが、「今ではすっかり元気のないまちになってしまった」といわれます。

平成8年度になって、地区の真ん中を通っている通称『お城通り』の、拡幅整備の事業化の話が浮上しました。加里屋では、過去にも再開発事業の話などもありましたが、様々な要因が重なって、いずれも途中で断念されてきました。今回は基盤整備としては「良くも悪くも最後の機会」だという危機感を誰もが持っていたようです。

そこで赤穂市と地域の方々による街路整備とあわせた加里屋地区の住環境の向上と地域の活性化に向けた奮闘が始まりました。「平成の城下町づくり」をスローガンに、忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会が結成され、地



賑わいをみせる金曜朝市

地域の自治会、婦人会、商店街、商工会議所、赤穂青年会議所など関係諸団体の代表者が、行政と協力しながら平成9年に活動を開始しました。私どもまちづくりコンサルタントとして共に話し合い、励まし合いながらお手伝いさせていただいています。

#### 加里屋に人を集めよう

昨年(平成10年)は、加里屋の将来ビジョンについて話し合われ、『忠臣蔵のふるさと～次代への提案(加里屋地区まちづくり構想)』が取りまとめられました。加里屋には、赤穂城跡や大石神社、花岳寺、息継ぎ井戸など、赤穂義士に関わるたくさんの遺構が残っていますが、観光客はこうした歴史遺産を見るだけでは満足しません。また、立派なお城やおいしい塩見饅頭があっても同じです。お店や普通の家々の佇まいと家並み、売られている物産品、そしてまちの人々とのふれあいなど様々な要素を通じて初めてそのまちを知り満足するのです。

大河ドラマの放映で目に見えて増えてきている観光客は、観光バスに乗せられてきて、団体でお城などの観光コース巡りをしているのが現状です。「カップルや家族連れで来て、一日、加里屋をぶらぶら歩いてもらえる、楽しんでもらえるようなまちにしたい」と協議会の葛野会長も言います。「まず、加里屋に人を集めないといけない」というのが、加里屋のまちづくりの合言葉なのです。

#### 「しおばな祭り」と「金曜朝市」

4月11日、加里屋に人を集めるための地元の取り組みとして「第一回しおばな祭り」が行われました。赤穂では毎年12月14日に「赤穂義士祭」が行われますが、義士装束の人達によるパレードが中心です。今回のしおばな祭りは、商工会議所や商店街が中心になって取り組まれた地元の手作りのお祭りです。テキ屋さんの屋台が並ぶのではなく、商店街や地域のおっちゃんがたこ焼き屋をやったり、イベントやフリーマーケットをやったりと、桜の季節ということもあり、なかなか和やかな雰囲気のお祭りとなりました。

また、お祭りだけでなく5月28日には新しい名所も誕生しました。「安い、新鮮、行列してもこれは得!」がキャッチフレーズの「金曜朝市」です。地元商店街の勉強会で、「個人個人の負担が少なく、人が集まるような仕掛けが必要だ」という声をきっかけに始められました。朝市は、近隣のJ Aからトラック一杯の野菜を仕入れ、「人件費無視」「売上げは原価を確保すれば良い」「余った野菜はみんなの家の晩御飯」ということで開かれています。呉服屋の御主人は「たくさんお客さんも来てくるし、やってる時はええけど..しんどいで」と微苦笑を浮かべていますが、なかなか楽しそうです。朝市は毎月、第二、第四金曜日の朝10時から売り切れるまで、場所はお城通り商店街柴田洋酒店前です。

#### 加里屋のまちを歩いてみよう

加里屋をはじめ、赤穂のまちには大きなもの(城跡や海浜公園等)から小さなものまで、たくさんの魅力ポイントがあるのにもかかわらず、あまりにも知られていません。また、みんなに知ってもらう努力も不足しているように思います。「道路さえ拡幅すれば良い」という狭い考えではだめ。沿道の家並みやにぎ

わい、赤穂はほかのまちとは違うなと思わせる何かをつくらないかん」と、会長は言います。少しずつですが「何か」が生まれつつあります。播州を訪れる機会があれば、是非、加里屋のまちを歩いてみてください。これからもガイドブックには載っていない赤穂の魅力スポットを、ニュースレターで紹介したいと思います。

(京都事務所 こうの りゅうじ)

京都府総合教育センター北部研修所が  
オープンしました

倉本 恒一

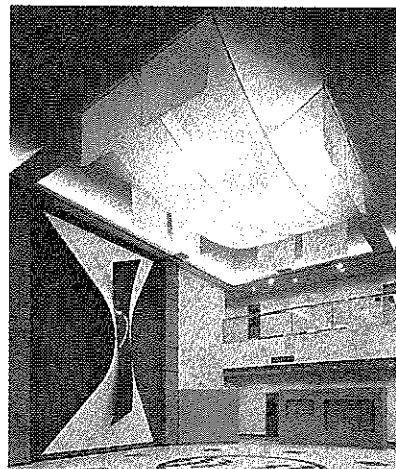
京都府のほぼ中央に位置する綾部市内に、今年4月、「京都府総合教育センター北部研修所」がオープンしました。技術革新や高度情報化、国際化等の高度化した社会に対応する学校教育を推進するため、府内の幼稚園、小・中学校、高校、盲・聾・擁護学校の教員のより一層の資質の向上と、研修の場として活用される施設です。総合教育センターは、京都市内に81年に本館を開設し、教員の教科研究や研修、教育相談に当たっています。しかし、府北部地域から距離的に遠いことや、高度な実験・実習・実技研修分野の充実、教育相談機能の充実の必要から、本館にはない機能を備えた新たな北部地域の拠点として北部研修所が建設されました。

館内には、理科と芸術、技術・家庭、教育相談、座学の5分野の研修施設があります。理科は4教科（物理、化学、生物、地学）の実習室や、高度な物質観察ができる精密機器室などを備え、芸術分野は、工芸工作実習室や平面制作実習室と音楽実習室などがあります。技術・家庭分野は調理と被服それぞれの実習室に、住居設計や保育、看護などの家庭科総合実習室。教育相談分野では、プレールームや面接室など。座学分野では一般研修室の他、稼動椅子付きで多目的に使用できる大

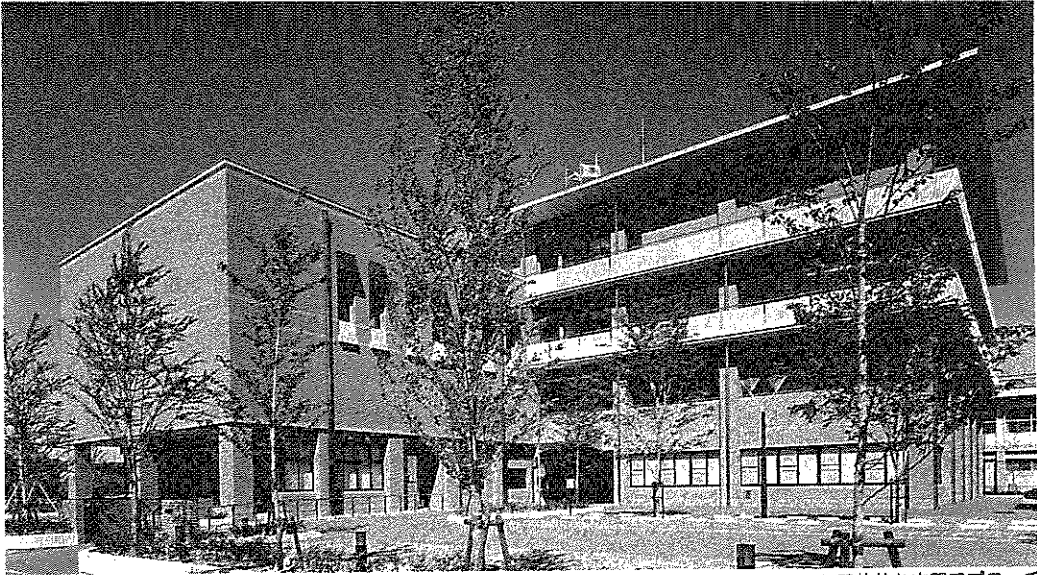
研修室があります。

プラン上の特徴では、1、2階吹抜けのロビーとその上階に設けた中庭を中心に囲み型とし、各室の通風や彩光を充分採り入れられるようにしてあります。教育相談部門や、大研修室は、夜間や休日の使用、また一般人の利用があるため開放的に、かつ独立して使用できるように配置されています。

敷地条件から4階建てとなる建物は、箱型の形状となり、由良川に隣接する敷地周囲の景観に対しボリューム感があります。そのため、屋上庇や各階に設けたバルコニーで水平ラインを強調して、周囲のなだらかな山並みを背景に重厚感を押さえています。外壁タイル貼は淡い土色で、澄んだ空と山の緑に調和するデザインにしています。正面玄関に入ってすぐのロビーには上部から自然彩光を採り入れるトップライトがあり、その光は吊るされた布地で和らげています。壁面には白布を張ったキャンバスをバックに、グラスファイバーで弓なりになった心材に朱色の漆で仕上げたオブジェが飾られています。このオブジェは漆造形作家の作品で、ハングライダーのような緊張した布と漆の鮮烈な赤い色は青年の羽ばたく力と情熱を表現しています。また、綾部市が綾織りの産地であること、星空が美しい街で毎年「全国星空継続観察」の上位にランクされていることなどから、布を素材と



ハングライダーのような漆造形のオブジェと布でやわらかな光がさし込む玄関ロビー



周囲にバルコニーのある研修室棟と開放的な玄関アプローチ

し、七夕の短冊をモチーフにしたともいわれています。

大研修室は、234席の階段状の稼動椅子を備え、会議や各種の催しなど多目的に使用できます。軽スポーツが可能なフローリング床と、シルバー色の吸音パネルの壁、照明や空調設備を露出した天井など、全体をスタジオ形式に自由に使えるようシンプルなデザインにしています。会議の内容を玄関ロビーでも観られたり、各室間で双方向の情報通信ができるよう館内LAN設備も将来対応として準備されています。

北部研修所の建設は、平成7年度からスタートし、平成8年度に基本設計・実施設計、平成9年、10年度の2カ年で建設工事が行われました。公共施設の建設では、備品工事の発注が予算執行上、竣工間際でないと確定しないので、よく現場と備品設置時に不具合が生じることがあります。今回も当初予定した備品の予算が削られ、変更されています。その点、教育庁学校教育課を中心に総合教育センター本館の教職員のひと々と現場の連絡がスムーズであったこと、施工業者のひと々がきちんと対応したことで無事完成しました。

(大阪事務所 くらもと つねかず)

## ジャズダンスにトライ

島津 史子

私ごとですが、4月24日(土)に大阪の森ノ宮ピロティホールで開催された、日本ジャズダンス芸術協会関西第9回公演に参加しました。実は3、4年ほど前にスポーツクラブの中でダンスを知り、踊る楽しさに吸い込まれ、気がつけばスタジオにまで通いだし、昨年の第8回公演からステージに立つようになったのです。

この公演は二部構成で、第一部では各グループがスクランブルにステージダンスを繰り広げ、第二部では今回のタイトル『彩・舞』をテーマにグループ作品を発表しました。参加グループは全部で9つで私の所属する“DA BEAT POSSE×ヤマグチ ヨウコ”は3作品を発表しました。私のグループは総勢17名で、中学生から主婦といろんな職種の人が集まっています。他のグループも同じように子どもから主婦まで幅広い年齢層のメンバーで楽しく作品を作っています。体を大きく動かして



大いに盛り上がった公演

みんな何かにチャレジしようという意気込みを感じます。観客にもそういったエネルギーが伝わったのでしょうか、公演は大いに盛り上がりました。

私は、まだダンスを始めたばかりなので「私を見に来て！」と大きな声で宣伝できませんが、皆さんも新しい世界をのぞいてみませんか？

8月8日(日)に八幡市にある八幡文化センターで、私が通うスタジオ「TMPPスタジオ」のオリジナルミュージカル『アパートメント』があります。お時間のある方は見にきませんか？お問い合わせは、島津まで。

(京都事務所 しまづ ふみこ)

**“名古屋まちづくりデータブック”を  
編集・発行しました**  
劔持 千歩

平成11年の4月に名古屋市市の都心部の南に位置する金山に、名古屋ポストン美術館、ホテル、(財)名古屋都市センターが入居する“金山南ビル”がオープンしました。金山には1日平均35万人が利用する総合駅があり、ビルのオープンを機に、新しい名古屋の拠点として生まれ変わりつつあります。

入居者の一つである(財)名古屋都市センターは、名古屋市の外郭団体であり名古屋のまちづくりに関して調査研究事業、情報の収集・提供事業、人材育成と交流などの業務を行

っています(参照: <http://www.nui.or.jp>)。

この(財)都市センターからの受託事業として、平成9年度から“名古屋まちづくりデータブック”の作成業務を行ってきました。その冊子が今年の3月に完成し、金山南ビルのオープンにあわせて発行されました(頒価1,000円)。“データが語る名古屋”というサブタイトルにもあるように、内容は①世界中の名古屋、②名古屋圏、③名古屋の成長・ストック指標、④豊かな都市づくりをめざしての4章から構成されており、名古屋を取り巻く状況、都市活動の変遷、今後の社会情勢の変化などのデータを掲載しています。

この冊子は、名古屋のまちづくりに関心を持つ人々に利用して頂けるよう、名古屋の街の特徴やこれからの課題をできる限り客観的に浮かびあがらせるという視点で作成しています。データは、国勢調査をはじめとする統計資料、行政や各種団体が発行している資料をもとに、三大都市・政令都市比較や、時系列変化など基本的なデータの分析を行い、グラフや絵を中心に分かり易く表現しています。私はこの業務で、データの収集・分析から冊子の編集に至るまでを担当し、名古屋をあらためてみる機会を得ることができました。

この冊子のようなデータブックは、利用する人によって何通りものストーリーができます。この冊子が名古屋のまちづくりに何らかの形で役立つことができればと思いつつ、売れ行きが気になる今日この頃です。

(名古屋事務所 けんもち ちほ)

＜編集部より＞  
前号に同封しました宛先確認ハガキ・FAXで多くのご意見・ご感想を頂き、ありがとうございました。編集部ではご意見を参考にさせて頂き今後もより充実した内容でニュースレターを発行していきます。

宮脇 檀 著

新潮文庫

## 「住まいとほどよくつきあう」

紹介 山崎 博央

この本を読んでまず思ったこと。自分が、どれくらい真剣に「住まい」について考えてきただろうか。そして、どれくらい真剣に「暮らし」について考えてきただろうか、ということ。

本書には、著者宮脇檀さんの「建築家」と「主夫」という2つの立場からの「住まい」と「暮らし」への提案が詰まっています。その中で印象に残ったものをいくつか紹介します。

## 「アメリカの住宅地で」

アメリカのオープンハウスの中では、ちゃんとしたインテリアデコレーターかコンサルタントを入れて、それこそ1軒当たり数百万円かけて、リアルでさまざまな演出がなされているそうです。このセッティングには、家を売るのはなく、住の環境やライフスタイルを売るといふこの国の姿勢が表れており、またそれは、買い手が自分のライフスタイル、生活感をハッキリ持っていて、それが包括される家であることを求めるからだそうです。

## 「玄関扉は内開き」

「玄関扉は内開き」というのが宮脇さんの考え方。住まいの玄関の扉というのは、客人に対して「いらっしゃい」と開けるべき扉なのであるということ。入ってもらいたくない人を拒否する場合は、遠慮無くピシャッと閉めればよい。それに対して、迎え入れたい人、大事なお客様等は、どうぞお入り下さいと招き入れるべきであり、となると、玄関は内開きにすべきである、ということ。実際は、内開き扉は、施工が難しいとか玄関の面積が大きく要るといった理由で、ほとんどの家の玄関扉は外開きになっていますが、ちょっと

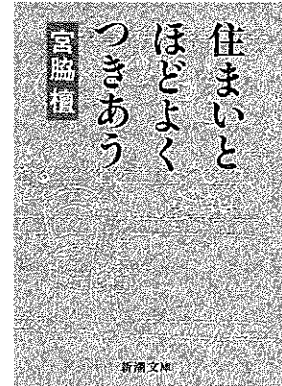
した努力でこれらは解消できます。妙に実利的な部分だけが評価される傾向がありますが、それ以外の部分にも大切なことがあるのではないのでしょうか。

## 「薄暗がりの教訓」

池に反射させた光を庇で受けて、部屋の奥までかすかにとどかせてみたり、障子で拡散させた光で室内を淡い明るさで満たしたり？といった、日本の空間の中で闇が担った演出の意味が忘れられてきているのではないのでしょうか。人間には明るさだけでなく暗さも必要であるということを再確認してみませんか。「明るさ」の中では気付かなかったことが見えてくるかもしれません。

設計に携わるものとして、一人の人間として、考えねばならないこと、思い出さねばならないことをたくさん教えてもらったような気がします。「住まい」を良いものにするには、まず「暮らし」を見つめ直すことから始まるということ。そしてその「暮らし」の中で、自分が何を求めているのかを認識することが大切だということ。宮脇さん曰く、「いかに住まうか」は「いかに生きるか」ということ。宮脇さんが住宅設計において一流であったのは、彼がまた生活の美学を持つ「暮らしの達人」であったからなのだと感じました。

(京都事務所 やまざき ひろひさ)



# まちかど

広幅員道路の町にはオープンカフェが似合う  
名古屋事務所探偵団

名古屋は区画整理の基盤整備で戦後都市計画の優等生と言われるが、反面、道路が広く街の魅力が乏しいなどの批判を受けている。建物や店づくりが広い道路を活かし切れていない。写真①は大津通の従来型ファッション店舗例だ。透明感と見え懸かりを主張している点は広い道路を活かしているが、境界を明確にしたクローズドな店づくりは従来型だ。最近、名古屋の道路特有の広い歩道を活かし、境界を曖昧にした店づくり、すなわちオープンカフェスタイルが急速に増えている。写真②以下は私たちの事務所のあるナディアパーク周辺に見られるオープンカフェの例だ。歩車一体の狭い道路の町では容易ではないが、ゆったりした歩道がある名古屋だからこそ、

<普通のお店のファサード>



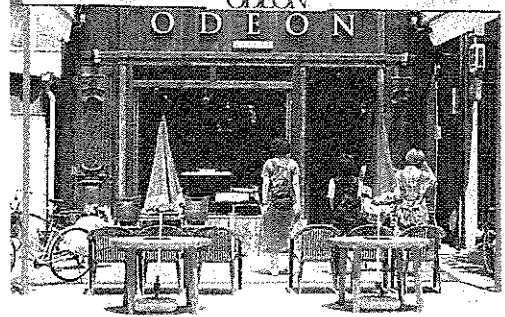
写真①：大津通のファッションビル 安藤忠雄設計

パリのようなオープンカフェが増えて不思議ではない。名古屋名物になりそうだ。

<最近のオープンカフェ>



写真②：ナディアパーク北のイタ飯屋 ピッツェリア・マリノ



写真③：古いビルの再利用 オデオン



写真④：市内で増えている喫茶店 カフェ・ド・クリエ



写真⑤：ナディアパーク南 カフェ・ビアンコ

## アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673